令和元年度新潟県病害虫発生予察情報・予報第６号
（８月の発生予想）

令和元年　７月２９日

【作物名】 病害虫名	予報内容 発 生 量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠

【水稲】

穂いもち	量：やや少ない 程度：少発生	①　７月下旬の葉いもち発生量は平年並。一部で多発事例が認められるが、上位葉の病斑は少ない。（±） ②　向こう１か月の気温は平年比高く（－）、降水量は平年比少なく（－）、日照時間は平年比多い（－）と予想されている。
	【防除上の留意事項】 ①　ほ場の葉いもち発生状況を確認し、発生程度に応じた防除対応を行う。特に新之助や多肥栽培および転作跡での発生に注意する。 ②　粉・液剤による防除の散布適期は、１回散布では出穂期、２回散布では出穂期直前と穂揃い期である。粒剤は薬剤により散布時期が異なるため、最新の「防除指針」を参照し適期に施用する。	
紋枯病	量：並 程度：少発生	①　７月下旬の発生量は平年並。（±） ②　向こう１か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年比少ない（－）と予想されている。
稲こうじ病	量：やや少ない 程度：少発生	①　前年の発生量は平年比やや少なく、伝染源量は平年比やや少ないと推定される。（±～－） ②　コシヒカリの幼穂形成期以降の降雨日数は平年比やや少ない。（±～－） ③　向こう１か月の気温は平年比高く（－）、降水量は平年比少ない（－）と予想されている。
ニカメイチュウ	量：やや多い 程度：少発生 （被害株率 1～29%） 時期：やや早い （第１世代発蛾最盛期 ７月第６半旬頃）	①　７月下旬の被害量は新潟地域が平年比多く、その他地域は平年並～やや少ない。県全体での被害量は平年比やや多い（＋） ②　向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少ないと予想されている。（±）
セジロウンカ	量：並～やや多い	①　７月下旬の発生量は平年並。（±） ②　向こう１か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）
ツマグロヨコバイ	量：多い 程度：少発生	①　７月下旬の発生量は平年比多い。（＋） ②　向こう１か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）

【作物名】 病害虫名	予報内容 発 生 量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠

【水稲】（つづき）

斑点米カメムシ類	量：やや多い 時期：やや早い	①　７月下旬の畦畔雑草地での確認地点率は平年に比べアカスジカスミカメがやや高く、アカヒゲホソミドリカスミカメが並、オオトゲシラホシカメムシがやや低い。（＋～±） ③　カスミカメムシ類２種の畦畔雑草地でのすくい取り虫数はいずれも平年比やや多く、イネ科雑草の出穂が多い畦畔での多発生事例が見られる。（＋） オオトゲシラホシカメムシのすくい取り虫数は平年比やや少ない。（－） ③　イネの出穂期はおおむね平年並みと予想される。（±） ④　向こう１か月の気温は平年比高いと予想される。（＋）
	【防除上の留意事項】 ①　斑点米カメムシ類の防除実施時期までに畦畔除草を行い、薬剤散布時には雑草が繁茂していない状態を保つ。 ②　コシヒカリの主要加害種であるアカスジカスミカメは畦畔雑草地における発生地点率は平年比やや高く、すくい取り虫数も平年比やや多いため、コシヒカリをはじめとする中生、晩生品種についても適期防除を徹底する。	
イネツトムシ	量：やや少ない 程度：少発生 （被害株率１～30%）	①　７月下旬の被害量は平年比やや少ない。（－）
イネアオムシ （フタオビコヤガ）	量：やや少ない 程度：少発生 （株当たり最高寄生数 １～10 頭）	①　７月下旬の幼虫発生量は平年比やや少ない。（－） ②　向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少ないと予想されている。（－）
コブノメイガ	量：並	①　フェロモントラップ誘殺数は近年並に少ない。（±） ②　７月下旬の被害発生は未確認で平年並。（±）
コバネイナゴ	量：多い 程度：少発生 （株当たり最高寄生数 １～10 頭）	①　７月下旬の県内各地域の成幼虫発生量は平年比やや多～多く、県全体の発生量は平年比多い。（＋） ②　向こう１か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）

【大豆】

紫斑病	量：やや少ない	①　前年の紫斑粒の発生は平年並で、伝染源量は平年並と推定される。（±） ②　向こう１か月の降水量は平年比少ないと予想されている。（－）
フタスジヒメハムシ	量：並	①　７月下旬の第１世代成虫の発生量は平年並。（±）
アブラムシ類	量：並	①　７月下旬の発生量は平年比やや少ない。（±～－） ②　向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少ないと予想されている。（＋）

【作物名】 病害虫名	予報内容 発 生 量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠

【大豆】（つづき）

ハダニ類	量：並	①　７月下旬の発生量は平年比やや少ない。（±～－） ②　向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少ないと予想されている。（＋）
ウコンノメイガ	量：並 時期：並	①　７月下旬の被害発生は平年比やや少ない。（±～－） ②　向こう１か月の降水量は平年比少ないと予想されている。（＋）
	【防除上の留意事項】 前年多発生した地域や大豆の生育が旺盛なほ場は、多発生しやすいので注意する。	
ツメクサガ等 食葉性鱗翅目幼虫	量：やや多い	①　７月下旬の被害程度は平年やや比多く、ツメクサガ等の寄生が確認される。（±～＋）
マメシンクイガ	量：やや少ない	①　前年の発生量は平年比やや少なく、幼虫の越冬量はやや少ないと推定される。（±～－）
	【防除上の留意事項】 防除適期は８月第６半旬～９月第２半旬であるが、薬剤の種類により時期や回数に違いがあるので、最新の「防除指針」を参照する。	
カメムシ類	量：並	①　予察灯等におけるクサギカメムシの誘殺数は平年比少ない。（－） ②　向こう１か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）

【なし】

黒斑病	量：やや少ない 程度：少発生 （発病葉率１～５%）	①　７月下旬の発生量は平年比やや少ない。（－） ②　向こう１か月の降水量は平年比少ないと予想されている。（－）
黒星病	量：多い 程度：少発生 （発病葉率１～５%）	①　７月下旬の発生量は平年比多い。（＋） ②　向こう１か月の気温は平年比高く（－）、降水量は平年比少ないと予想されている。（－）。
	【防除上の留意事項】 ①　発病葉、発病果は見つけ次第除去し、土中深く埋める等適切に処分する。 ②　徒長枝を整理して薬剤がよくかかるようにする。また、薬液のかかりにくい園地の周縁部は補正散布を行う。 ③　気象予報に留意し、降雨前散布を励行するとともに、かけむらのないよう丁寧に散布する。 ④　耐性菌の発生を抑制するため、同一系統薬剤の連用は避け、作用機構の異なる剤を交互使用する。 ⑤　薬剤防除の際には、使用する薬剤の使用前日数等に十分注意する。 ⑥　翌年に伝染源を持ち越さないように、秋期防除及び休眠期の落葉処理を実施する。	

【作物名】 病害虫名	予報内容 発 生 量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠

【なし】つづき

褐色斑点病 （西洋なし）	量：並 程度：少発生 （発病葉率１～５%）	①　７月下旬の発病葉の発生量は平年比やや多い。（＋） ②　向こう 1 か月の降水量は平年比少ないと予想されている（－）
	【防除上の留意事項】 ①　発病葉、発病果、発病枝は剪除し、園外に持ち出し適切に処分する。 ②　徒長枝を整理して薬剤がよくかかるようにする。また、二次伸長枝は発病しやすいので、剪除し適切に処分する。 ③　気象予報に留意し、降雨前散布を励行するとともに、かけむらのないよう丁寧に散布する。また、薬液のかかりにくい園地の周縁部は補正散布を行う。	
ナシヒメシンクイ	量：やや多い 程度：少発生 （被害果率１～２%） 時期：並 （第２世代成虫の発蛾盛期は７月第５半旬～第６半旬）	①　７月下旬のももの新梢被害の発生量は平年並。（±） ②　フェロモントラップ誘殺数は平年比多い。（＋） ②　有袋栽培等物理的防除の実施率が高い。（－） ③　向こう１か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）も
	【防除上の留意事項】 ①　被害果を見つけた場合は、土中深く埋めるなど適切に処分し、成虫の発生を防ぐ。 ②　果実被害は収穫期が遅いものほど多くなる傾向があるので、中生～ 晩生品種（豊水、新高など）は特に注意する。	
ハマキムシ類	量：並～やや多い 程度：少発生 （被害葉率１～15%）	①　７月下旬の発生量は平年並。（±） ②　リンゴコカクモンハマキのフェロモントラップの誘殺数は新潟地域では平年並であるが、下越、中越地域は平年比多い（±～＋） ③　向こう１か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）
モモシンクイガ	量：並	①　７月下旬現在、被害果は未確認で平年並。（±） ②　フェロモントラップ誘殺数は下越、新潟地域は平年並であるが、中越地域は平年比多い。（±～＋） ③　有袋栽培等物理的防除の実施率が高い。（－） ④　向こう１か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）
果樹カメムシ類	量：並	①　７月下旬現在、被害果は未確認で平年並。（±） ②　予察灯での誘殺数は概ね平年並～やや少ない。（±～－） ③　有袋栽培等物理的防除の実施率が高い。（－） ④　向こう１か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）

【作物名】 病害虫名	予報内容 発 生 量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠

【なし】つづき

ハダニ類	量：やや多い 程度：少発生 （寄生葉率１～15%）	①　７月下旬の発生量は概ね平年並であるが、一部で甚発生園地が認められている。（±～＋） ②　向こう１か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年比少ないと予想されている。（＋）
	防除上の留意事項】 ①　徒長枝を整理して薬剤がよくかかるようにする。 ②　ハダニ類は、薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一殺ダニ剤の使用は原則として年１回とし、作用機構の異なる薬剤を交互に使用する。 ③　収穫時期が近い品種については、農薬の使用時期（収穫前日数）に注意する。	

【もも】

せん孔細菌病	量：並 葉の発生程度： 少～中発生 （発病葉率１～15%） 果実の発生程度： 少発生 （発病果率１～５%）	①　７月下旬の発病葉の発生量は平年並。（±） ②　７月下旬の発病果の発生量は平年比やや少ない。（－） ③　向こう 1 か月の降水量は平年比少ないと予想されている。（－）
	【防除上の留意事項】 ①　新梢に発生する夏型枝病斑は見つけ次第剪除し、園外に持ち出し適切に処分する。 ②　次年度の伝染源量を減少させるため､収穫後の防除は必ず実施する。	
灰星病	量：やや多い～並 程度：少発生 （発病果率１～５%）	①　７月下旬の発病果の発生量は平年比やや多い。（＋） ②　向こう 1 か月の降水量は平年比少ないと予想されている。（－）
	【防除上の留意事項】 ①　発病果は見つけ次第取り除き、土中深く埋める等適切に処分する。 ②　品種により収穫期が異なるので、薬剤防除にあたっては隣接園地への飛散に十分注意するとともに、農薬使用基準（収穫前日数）を遵守する。	
モモハモグリガ	量：やや少ない～並 程度：少発生 （被害葉率１～５%）	①　７月下旬の被害葉の発生量は平年比やや少ない。（－） ②　フェロモントラップでの誘殺数は平年比やや少ない。（－） ③　向こう 1 か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）
ナシヒメシンクイ	量：やや多い 程度：少発生 （被害果率１～２%）	①　７月下旬の新梢被害の発生量は平年並。（±） ②　フェロモントラップ誘殺数は平年比多い。（＋） ③　向こう 1 か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）

【作物名】 病害虫名	予報内容 発 生 量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠

【もも】つづき

モモシンクイガ	量：並～やや多い	①　７月下旬現在、被害果は認めず平年並。（±） ②　フェロモントラップ誘殺数は下越、新潟地域は平年並であるが、中越地域は平年比多い。（±～＋） ③　向こう１か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）
ハダニ類	量：並～やや多い 程度：少発生 （寄生葉率１～15%）	①　７月下旬の発生量は平年比やや少ない。（－） ②　向こう１か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年比少ないと予想されている。（＋）

【ぶどう】

晩腐病	量：やや多い 程度：少発生 （発病果房率１～10%）	①　７月下旬現在、発病果は認めず平年並。（±） ②　主要感染期の６月下旬に断続的な降雨があり､平年より降水量が多かったことから感染量も平年比多いと推察される。（＋） ③　向こう１か月の降水量は平年比少ないと予想されている。（－）
べと病	量：並～やや少ない 程度：少発生 （発病葉率１～10%）	①　７月下旬の発生量は平年並。（±） ②　向こう１か月の降水量は平年比少ないと予想されている。（－）
褐斑病	量：並～やや少ない 程度：少発生 （発病葉率１～10%）	①　７月下旬の発生量は平年並。（±） ②　向こう１か月の降水量は平年比少ないと予想されている。（－）
ペスタロチアつる枯病	量：並 程度：少発生 （発病果房率１～10%）	①　７月下旬現在、発病果は認めず平年並。（±） ②　向こう１か月の降水量は平年比少ないと予想されている。（－）
フタテンヒメヨコバイ	量：並	①　７月下旬現在、被害葉は認めず平年並。（±） ②　向こう１か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）

【かき】

すす点病	量：並～やや少ない	①　７月下旬現在、発病果は認めず平年並。（±） ②　向こう１か月の降水量は平年比少ないと予想されている。（－）
チャノキイロアザミウマ	量：並～やや多い	①　７月下旬現在、被害果は認めず平年並。（±） ②　向こう１か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）
果樹カメムシ類	量：並～やや多い	①　７月下旬現在、被害果は認めず平年並。（±） ②　予察灯での誘殺数は概ね平年並～やや少ない。（±～－） ③　向こう１か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）

【作物名】 病害虫名	予報内容 発 生 量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠

【秋冬ねぎ】

さび病	量：やや少ない 程度：少発生 （発病度１～５）	①　７月下旬の発生量は平年比やや多い。（＋） ②　向こう１か月の気温は平年比高く、降水量は平年比少ないと予想されている。（－）
黒斑病	量：やや少ない 程度：少発生 （発病度１～20）	①　７月下旬の発生量は平年並。（±） ②　向こう１か月の降水量は平年比少ないと予想されている。（－）
軟腐病	量：並 程度：少発生 （発病株率１～５％）	①　７月下旬の発生量は平年並。（±） ②　向こう１か月の気温は平年比高く（＋）、降水量は平年比少ないと予想されている。（－）
ネギハモグリバエ	量：並 程度：少発生 （被害度１～10）	①　７月下旬の発生量は平年比少ない。（－） ②　向こう１か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）
ネギアザミウマ	量：多い 程度：多発生 （被害度 21～30）	①　７月下旬の発生量は平年並だが、多～甚発生ほ場も認められた。（±～＋） ②　向こう１か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）
	【防除上の留意事項】 盛夏期前から密度が急増するので発生状況に注意し、発生が多いほ場では、定期的に防除を行い、密度抑制に努める。	
ネギコガ	量：並 程度：少発生 （被害株率１～25%）	①　７月下旬の発生量は平年並。（±） ②　向こう１か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）
シロイチモジヨトウ	量：並 程度：少発生 （被害株率１～５％）	①　７月下旬の発生量は平年並。（±） ②　フェロモントラップの誘殺数は、平年並。（±） ③　向こう１か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）

【その他】

【アブラナ科野菜】 コナガ	量：やや少ない	①　フェロモントラップ誘殺数は、平年並～やや少ない。（±～－） ②　向こう１か月の気温は平年比高いと予想されている。（－）
【野菜類全般】 オオタバコガ	量：並～やや多い	①　フェロモントラップ誘殺数は平坦部では平年並～やや少なく、山間部では平年比やや多～多い。（±～＋） ②　向こう１か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）
【全般】 ハスモンヨトウ	量：並	①　フェロモントラップ誘殺数は平年並～やや少ない。（±～－） ②　向こう１か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）

～　防除上の注意事項は、最新の「新潟県農作物病害虫雑草防除指針」を参照してください　～

注１：①「予報内容」の発生量は、予想される発生量が、新潟県における平年の発生量に比べて多いか少ないかを、少、やや少、並、やや多、多の 5 段階で表記しています。

②発生程度は、予想される発生量が、国の調査実施基準等で定められている、無発生、少発生、中発生、多発生、甚発生のいずれに該当するかを表記しています。

注２：　「予報の根拠」の、（＋）は発生量を増加させる要因、（－）は発生量を減少させる要因、（±）はどちらともいえない要因を示しています。

～　農薬は適正に使用しましょう　～

【新潟県農薬危被害防止運動実施期間：６月１日～８月 31 日】

○　農薬の準備・使用にあたっては、必ず最新の農薬登録情報を確認しましょう。

○　使用に際しては、ラベルに記載の使用基準や注意事項をよく読み、使用者が責任を持って使いましょう。

○　農薬の飛散防止に努めましょう。周辺作物や住宅及びミツバチ等への危害防止のため、周辺の生産者や住民、養蜂業者に事前に防除計画を通知するなどの対策をとりましょう。

○　農薬の使用後は防除日誌や作業日誌等の記帳に努めましょう。

○　水田で湛水して農薬を散布する場合は、７日間の止水を厳守し、落水しないようにしましょう。

新潟県病害虫防除所業務課
電　話：0258-35-0867
ＦＡＸ：0258-35-7445
ＵＲＬ：www.pref.niigata.lg.jp/bojo

【参考】北陸地方　１か月予報（７月２７日から８月２６日までの天候見通し）
（新潟地方気象台：令和元年７月２５日発表）

＜予想される向こう１か月の天候＞

向こう１か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう１か月の平均気温は、高い確率５０％です。

降水量は、少ない確率５０％です。

日照時間は、多い確率５０％です。

週別の気温は、１週目は、高い確率５０％です。

２週目は、高い確率５０％です。

＜向こう１か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）＞

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気　　温	２０	３０	５０
降 水 量	５０	３０	２０
日照時間	２０	３０	５０

＜気温経過の各階級の確率（%）＞

	低い	平年並	高い
１週目（７月２７日～８月　２日）	２０	３０	５０
２週目（８月　３日～８月　９日）	２０	３０	５０
３～４週目（８月１０日～８月２３日）	３０	３０	４０